すぎなみ大人"熟"してる？

Jukusiteru? TIMES'17

第２号

平成29年７月19日発行
発行元：塾熟出版（事務局）
東京都杉並区梅里 1-22-32(社会教育センター内) TEL 3317 －6621 FAX 3317 －6620

GENERATION LAB - コノ時代ヲ解読セヨ -

調べ方「ジャーナリスト」篇

5月14日 受講生32名

ゲスト：高瀬　毅　氏【ジャーナリスト、ノンフィクション作家】

高瀬　毅　氏

昨年のアメリカ大統領選挙戦において、"Post Truth" という言葉が話題になった。客観的な事実よりも個人の信条・感情に訴えるものの方が影響力を持つ状態のことだ。100%嘘だとわかるフェイクニュースが世の中に溢れ、事実が軽視される社会。今回の総合コースで「知る」「調べる」ことを題材にしたのはこのような社会の現状が背景にある。

「調べ方～ジャーナリスト篇～」では、ジャーナリスト・ノンフィクション作家の高瀬毅氏をお招きして講義をしていただいた。テレビ、ラジオ、新聞や雑誌など様々な分野でニュース報道に関係するお仕事をされていた方である。メディアの特性や報道の役割などについて、実際の事件の報道事例等を交えて、お話しいただいた。

昔と比べて、よりジャーナリズムが弱り、批評・論評という本来の役割を果たせていない現状は決していい状況とは言えない。メディアは巧みに言葉の言い換えや本質のすり替えをし、印象操作やミスリードを誘うことで、真実を見えなくしてしまうこともある。嘘も事実もない混ぜに様々な情報が溢れる情報社会で、受け手である私たちがどのように情報を精査し、事実をとらえていけばよいかを考えさせられた。

メディアには伝わる速度がある。陸上に例えると短距離型、中距離型、長距離型があり、それぞれの速度・スタイルを持って発信している。短距離型は断片を切り取って伝えるので、新聞やテレビ、ラジオ、ネットが相当する。中距離型は人間をドラマのように切り取るスタイルで、週刊誌、月刊誌、季刊誌に相当する。また長距離型となると、壮大な時間をかけて取り組んで伝えるので、小説やノンフィクションのような書籍、ドキュメンタリーがそれに当たる。私たちは多様な形で情報を得ていることがよく分かった。高瀬氏の「積み重ねで見えてくるものがある」という言葉が印象に残った。一時の報道の大小や順序に惑わされず、流れでニュースを見ていくことが必要であろう。

ワークショップ

ワークショップ▶の様子

後半の時間では、４～５人ほどのグループに分かれてワークショップを行った。その内容は、１人の発言者に「人間関係で印象に残ったこと」を話してもらい、他の人はそれを聞き取り、できるだけ自分の考えや感情を交えず、事実のみを 200 字にまとめるというものだ。受講生のみなさんは、熱心に聞き取りをしていた。各自で原稿用紙に内容をまとめる際もみなさんスムーズにペンを動かしていた。各グループで完成した原稿を読み比べた後、全体で聞き取った内容や感想を発表してもらった。同じ話を聞いていても、言葉の使い方やどこにポイントを置いて原稿を書くかなど、話のとらえ方やまとめ方に違いがあり、一人ひとりの個性が感じられたという声が多かった。また、自分は中立的に聞いているつもりでも、自分の聞きたいように話を捉えていると感じたという声もあった。

事実と真実とは違う。報道の仕方に惑わされず、物事を多面的にとらえ、真実を見極めていく姿勢を持ち続けていきたい。

〇すぎなみ大人"熟"してる?の発行にあたって〇　この新聞は事務局スタッフの視点と記録に基づいて作成しております。

すぎなみ大人"熟"してる？

Jukusiteru？ TIMES'17

平成29年７月19日発行
発行元：塾熟出版（事務局）
東京都杉並区梅里 1-22-32(社会教育センター内) TEL 3317 －6621 FAX 3317 －6620

6月21日
受講生27名

GENERATION LAB - コノ時代ヲ解読セヨ -

調べ方「アカデミック」篇 ゲスト：坂口 緑 氏 【明治学院大学社会学部教授】

最初に学習支援者である伊藤さんから、今回「アカデミック」篇を企画した理由が話された。
普段見ているメディアからの情報は、基本的な情報を持っている人からの発信を流通させることからはじまる。その、はじめの情報となるのが学問だと思う。今日は「アカデミック」の観点から勉強していきたい。

坂口 緑 氏

明治学院大学 坂口緑先生

先生はデンマークに留学した際に生涯学習に興味を持ち、現在も研究をされている。
まず、社会学を大学生に教える際に見せる、広告で使われているグラフや表を参考に、広告と学問での資料の見せ方が違うことを学んだ。

◇学問の起源
学問の分野によって論理に違いがあるのかどうかや、学問の成り立ち、論理的でないこととはどんなことかを考えていった。
また、国の「科研費」を例にとり学問はどのように分類されているのかお話しされた。現在の学問の種類が321 個ある事がわかった。
プラトンが作った「アカデメイヤ」の話、大学のもととなるリベラルアーツ、その後のデカルトによる学問の近代化など、改めてその起源についてふりかえる時間となった。

◇学問におけるデーターとは
1996 年に起きた「ソーカル事件」や、ＳＴＡＰ細胞で有名になった小保方氏の話から、学問におけるデータとは何か、についてお話しされた。

◇ワークショップ
論文指導時に、学生のテストで使用しているプリントを使ってワークショップを行った。細かく区切られた文章を、正しい順番に並べ替えていくものであったが、皆学生に戻って、わいわいと楽しく行った。論理的に説明する文章をどう組み立てていけばいいのか、それぞれに解釈が異なり、2 割くらいの方が正解していた。

【最後に伊藤さんから】
皆さんは学者になるわけでもなくジャーナリストになるわけでもないが、仕組みを知ることでからくりが分かる。「調べ方」の直接的なノウハウにつながるので、今日はそのからくりの部分をお話しいただいた。

感想集

・アカデミックな立場から、物事を調べるためにはその立場での論理に沿った解釈をしなくてはいけないと思った。
そういう意味では、解りやすい内容の講義であった。
また　ワークショップは、自分の思考の回路をみるいいキッカケとなった。

・普段考えないアカデミアの社会で「論理的に考える」について坂口先生から話してもらい、とても良かった。
アカデミックの社会にいない自分＝個人がどう物事を「論理的に見るか」を少し考えてみたいと思った。